

柳炳徳『近・現代韓国宗教思想研究』

マダン企画, 2000年, 404頁, 18000ウォン

古田 富建

2002年は日韓ワールドカップが開催され、両国間において多岐にわたる交流が盛んに行われた。しかし韓国宗教を専門とする日本人研究者はまだ少なく、隣国でありながらその思想や宗教についてもあまり知られておらず、日本語で書かれた韓国・朝鮮宗教に関する専門書も少ないのが現状である。

韓国内でも1980年代までは新宗教研究はほとんどされておらず、60年代から宗教研究を行ってきた著者の柳炳徳氏（現韓国宗教社会学会会長）は姜敦求氏などと並んで韓国新宗教研究の第一人者となっている。本書は著者の過去20年間の研究実績をまとめたもので、10以上の新宗教を取り上げて思想分析をしている。本書評を通じて、韓国近現代の宗教への理解が少しでも深まればと思う。

本書は編集段階で10回も手を入れるなどトピックに一貫性がないと著者が述べており、全体としての論文の流れはあまり明確ではない。またトピックの数を考えても全体を網羅することは困難なので、敢えて目次の詳細を記載しておくことにする。

第一章 序論；韓国人の宗教性

- 1節 変わるものと変わらないもの、2節 純粋性と調和性、3節 韓国人の宗教体験、4節 後天開闢と民衆魂（精神）、5節 平和統一と宗教倫理

第二章 韓国伝統宗教思想の現代的照明

- 1節 儒教思想の現代的照明、2節 仏教思想の現代的照明、3節 道教思想の現代的照明

第三章 韓国キリスト教思想の現代的照明

- 1節 現代韓国カトリックの思想、2節 現代韓国プロテスタントの土着化思想、3節 解放神学と民衆神学、4節 対話神学と文化神学

第四章 韓国自生宗教の様相

- 1節 弥勒信仰と鄭鑑録、2節 東学思想と未来の宗教像、3節 甌山の民族的民衆宗教魂（精神）、4節 新生宗教に現れた擬似弥勒信仰、5節 圓仏教の弥勒龍華会上観

第五章 韓国民衆宗教の5大脈

- 1節 東学思想、2節 金一夫の正易思想、3節 甌山の神明思想、4節 羅喆の三一思想、5節、少太山の一圓思想

第六章 韓国自生宗教の民衆思想

- 1節 高等宗教と民衆宗教、2節 韓国民衆宗教の形成、3節 80年代韓国の民衆論議、4節 韓国の自生宗教の行き先、5節 韓国民衆宗教思想の特徴

第七章 新興民族宗教の台頭

- 1節 金剛大道の三教合一思想、2節 更定儒教「一心教」思想の特徴、3節 覺世道の正圓思想、4節 靈主教の靈命思想、5節 ハンオル教のパルンニム思想

第八章 統一教（統一教会）の思想の特徴

- 1節 再臨論と聖書解釈の違い、2節 原理講論の統一思想、3節 統一教の教名の変化、4節 統一思想の異端論争

第九章 韓国他宗教現象の諸問題

- 1 節 韓国における宗教概念の再考, 2 節 神明現象の宗教学的解釈,
3 節 大倭教とハンオル教思想の比較, 4 節 80 年代民衆仏教の論議, 5 節 日本宗教流入の問題点
第十章 結論: 伝統思想と韓国宗教
1 節 伝統の概念と文化意識, 2 節 21 世紀平和文化と東洋宗教, 3 節 韓国伝統思想の理解,
4 節 韓国思想の原型と祖型, 5 節 「ハンブル」思想とは?,
6 節 韓末・日帝植民地期の「ハンブル」思想, 7 節 正しい伝統思想の継承問題

本書には一貫した構成を持つ流れはないものの、中心に位置づけられている概念がいくつかある。一つは韓国人の本来の心性だとされる「仙」思想である。自然との調和や寛容性で表現されるこの思想は韓国自生のもので、古朝鮮の檀君の宗教性でもある。二つ目は「民衆魂」で、疎外された階層が自らの主体性を取り戻すために闘争する精神のことについて書いている。三つ目は「民族主体（ナショナリズム）」についてである。近代に日本の植民地となっていたという特殊な事情と、現代においても韓国の思想が世界的に注目され研究されることが少ないことから、民族の主体性の模索が重要なテーマとなっている。そしてこの三つを併せ持った5つの新宗教を「民族的民衆宗教」と名付け、理論的に分析を展開している。そのほか、「民族的民衆宗教」の五大派以外の新宗教の思想について論じている。

1 章では「仙」思想と「民衆魂」、そして「民族的民衆宗教」の思想である「後天開闢」思想について説明している。著者は韓国宗教の原型は、韓国から発生した「仙」と、早くから入って来た「巫」であるという。また日本の植民地として圧迫を受ける民衆の救済、恨プリ（恨みを解く）ことを唱え、「後天開闢」が朝鮮半島で起こり民衆が主人となる時代が来るといって、実践的運動を展開した「民衆魂」を持つ宗教が存在したことについて述べている。

2 章, 3 章では近現代韓国の儒教, 仏教, 道教, キリスト教の概略について述べ、その現代社会における機能や実践的意義について考察している。

儒教は、公共精神や人類愛など現代韓国の社会規範において必要な機能を果たしていると評価し、朝鮮時代の丁若鏞の「実学」について再評価を試みている。「実学」は、一般的に理論偏重の朱子学批判から生まれたといわれているが、理論と実践を併せ持つ原始儒教の回復であり、カトリックの影響と脱性理学的傾向との結合によって生まれた新たな次元の儒教という観点で捉え、民衆中心の思想であったことから、その後の「民衆宗教」運動を生み出す思想的な媒介者としての役割を果たしたと述べている。

仏教については社会的機能の回復のための現代化の必要性を述べている。現代社会の分裂と対立を解消し平和な世界を実現するには、仏教の「無我」、「縁起思想」が有効であるという。特に元曉の「一心和諍思想」は、新羅人の心をつにして三国統一の精神的枠組みを定立させただけでなく、ばらばらな大乘仏教を一つにまとめる普遍的な人間観を提示したという。

次に著者は、仏教史の中で儀礼中心の宗派は衰退し、より実践を重んじる宗派が残るようになったことから、実践的な道教である「修練道教」に着目している。朝鮮初期の道教は儀礼的であったが、知識人の間で広まった「丹学」といわれる修練道教は、道教的医学を体系化させるなど儀礼に留まらないものだという。その思想は「天人合一」、「敬天思想」、「弘益人間」思想など韓国の「仙」思想の理念を基盤にシャーマニズムと習合しながら形成されたもので、封建体制の中での民衆社会を形成していく際の思想的核としての役割を果たしたという。

第二次バチカン協議会で平信徒の位置や使命が強調された流れから、朝鮮半島のカトリックで

も「平信徒運動」が起こり、60年代には労働運動、農民運動、人権運動、プロテスタントとの教会一致運動など、韓国内における「土着化」が進行中であることを評価し、今後の課題は福音の「韓国的理解」、「韓国的神学」の定立であると述べている。韓国のプロテスタントは、解放後から60年代までは「保守神学」が主流だったが、60年代に「土着化」論争が起こり、「韓国的神学」の主体性を模索する中、多様な神学が生まれた。著者は以下の3つの流れに分類している。一つは「保守主義的正統神学」で、朴亨龍を頂点に聖書逐語靈感説を根拠とした聖書主義に立ち、反エキュメニカル運動的な神学であるという。神の摂理に依存しているため、社会問題には無関心で、脱世俗的で霊的救援のみ関心を持ち、過去志向的伝統主義であると評価が低い。二つ目は70年代に本格化した「進歩主義神学」で、朴正熙大統領の維新体制による急激な経済成長と社会変動による不条理現象から、社会や政治に目を向けた運動を展開したという。代表的なのは徐南洞の「民衆神学」で、70年代に南米で波紋を呼んだ「解放神学」が、韓国教会で韓国化したものである。「解放神学」が階級論・経済問題のみに着目したのに対し、「民衆神学」は疎外論に基づき社会・文化・政治全てを扱い、「罪」は社会構造だけにあるのではなく、「靈魂」の問題も重視した点を評価している。三つ目は韓国伝統文化との関係の中でキリスト教を展開させた「宗教神学」である。「進歩神学」が世俗に向けた神学であるのに対し、「宗教神学」は民衆意識が基層にある土着化神学であるという。メソジスト系の研究者がその中心で、尹聖範は儒教との関係、柳東植は巫俗との関係、邊鮮煥は仏教との関係を研究した。

4章、5章、6章では、「民族的民衆宗教」について論じている。韓国自生宗教である「民族的民衆宗教」の中には、共通して「弥勒信仰」や『鄭鑑録』という預言書を用いた韓国版「千年王国」思想が展開されているという。『鄭鑑録』の予言の内容は、5百年間で李氏王朝が滅亡し、鄭氏によって鷄龍山に新しい王朝が立てられるというもので、圧政に苦しむ民衆の願いが反映されているとともに、はるか三国時代の頃から乱世のたびに民間仏教の領域で盛行してきた「南朝鮮信仰」⁽¹⁾と同じ脈とも捉えられるという。著者は「民衆宗教」の五大脈に、東学、「正易」思想、甌山教、大倥教、圓仏教を挙げている。

19世紀中葉各地の反乱や西洋の侵略に対する社会不安が増大するなか、崔濟愚によって儒教・仏教・仙教を習合した東学が起こった。2代目教祖崔時亨は教義を体系化して南部朝鮮への布教を図り、19世紀末には国政刷新を訴える民衆運動を展開させ、虐げられていた多くの民衆らが加担して甲午農民運動(1894)に発展した。結局日本の勢力と朝鮮王朝により鎮圧されたが、この運動を通して民衆の中に民族の将来に責任を持つ意識が芽生えていったという。

金一夫は後天世界の到来を易学的に明らかにしようと「正易」思想を生み出した。他の後天思想が人間社会の変革のみを唱えるのに対し、一夫は宇宙の運行秩序の変化と人間の内的な精神世界の変革を主張した。

姜甌山は「神明」思想を展開した。「神明」とは靈魂や来世などを指し、「神明」世界は人間界と同等で互いに影響し合う密接な関係にあり、人間は死ぬと「魂」と「魄」に分れるが、恨みを持った「魄」が「神明」になると地上世界に害を及ぼし、地上の争い事は「神明」世界に害を及ぼすという。さらに甌山は自らを弥勒菩薩と称し「後天仙境調和政府」を作るという思想を展開させた。先天は恨をもった靈魂により地上には多くの罪悪が存在していたが、「天地公事」⁽²⁾という儀式によって天地運度が変わり平和世界が実現されるという。後天時代は「人尊時代」であ

ることから「三綱五倫」⁽³⁾を強調したりもしている。

大宗教の教祖羅喆⁽⁴⁾は「三・一思想」を展開した。この思想は、外から見ると一つであるが、内容は3つの要素からなるというものである。これを宇宙論に適応すると「三身一体論」となり、人生の問題に適応すると「三真帰一観」となる。「三身一体論」は「ハンオル思想」とも言い、大宗教の神観を現している。万物を創造し世界を主管した「ハンオル」は「在無上一位」の神で、造化の神「桓因」、教化の神「桓雄」、治化の神「桓儉」⁽⁵⁾の3神が合わさったものである。また人間は「物」とは違って「性・命・精」を先天的に与えられているので、それに気付き功徳を積み、全人類が等しく各々の習得段階に合った「ハンオル」になれるという理論を「三真帰一観」という。圓仏教の開祖少太山⁽⁶⁾は「一圓思想」を展開した。円の形は宇宙の究極的真理を現しており、人間は自らの人格をこれに連結させなければならないという。少太山は宗教的閉鎖性を打開しようと「圓融会通」という和合原理を提示した。弟子たちは宗教、教派、思想の和合、人種、民族の和合、全ての活動は社会に貢献するものでなければならないなど、この理念を具体化させた。

以上の五大脈を踏まえた上で著者は「民衆宗教」について論じている。宗教は「原始宗教」から「民族宗教（国家宗教）」、「高等宗教（世界宗教）」へと発展するといわれてきたが、21世紀の多元化時代には「民衆宗教」の名がよりふさわしいという。「原始宗教」は教団を介さないで、個人が恐れを感じ祈る純粋な宗教性を具えているが、明確な教理がなく、国家の精神的支柱となる「国家宗教」は一つの国家に限定される限界があり、「高等宗教」は向上性価値観ゆえに高等と未開の構造を作り出しているという。これらに対して「民衆宗教」は、原始宗教の宗教性を民衆の心性に還元させ、民族宗教の中の民族の長い歴史と伝統を継承し、高等宗教の向上性価値観を downward 価値観に転換させる役割を果たすという。ちなみに韓国には「国家宗教」は存在せず、歴史の汚点をぬぐうための民族性更生運動としての宗教のみ存在していたために、21世紀の新しい精神世界を担う可能性があるという。

また著者は「民族宗教」と「民衆宗教」に独自の意味を付与している。「民族宗教」とは同一の民族成員の中に宗教的創始者がおり、韓民族の重んじてきた伝統的信仰にアイデンティティーを持っている宗教を指す。「民衆宗教」は創始者・中興者の出身が「民衆層」であり、教団の信者層も「民衆層」を中心としている宗教を指す。7章、8章ではその他の新宗教を考察している。ここでは韓国の新興宗教の中でも代表的な「統一教会（統一教）」を取り上げる。

「統一思想」は聖書・西洋キリスト教を基本にしなが、儒教や仏教、韓国の伝統思想が含まれており、宗教と科学、国と国などあらゆるものの統一を訴え、地上天国建設を主張するなど、肉的現世的救済を強調し、思想的には「反共産思想」「家庭の重視」「韓国選民思想」といった特徴がある。1997年「世界平和統一家庭連合」に改名してから、大型教会から家庭教会の時代、キリスト教から超宗教、国境・人種・思想を超越した「真の家庭理想の実現」を唱えるようになった。父母・夫婦・子女が変わらぬ愛を中心に一つとなり、純潔を守り、利他的・犠牲的の愛の模範となる伝統を建てるのが家庭であると主張し、「真の家庭運動」を繰り返している。合同結婚式の主礼⁽⁷⁾の権限が各信者家庭にも付与されるなど、重要行事の中にも様々な変化が見られる。

統一教は韓国では良くも悪くも有名である。教団側は、自らの形骸化・排他性のためにキリスト教が担当できない「神の摂理」を実現する教会だと主張する。それに対して韓国内のプロテスタントは統一教に関する各種研究機関を設けて組織的に批判しており、他宗教に比較的寛容な教

皇庁でさえも、教理と活動がカトリックのものとは衝突することから統一教には否定的である。しかし著者は、「正統保守神学」の立場からは「異端」だとせざるをえないが、原理講論の「再臨論」では特異な聖書解釈をするなど「韓国的神学」を志向し、歴史哲学を提起し、韓国から世界へ発信していることは評価できるとしている。

9章ではその他の宗教現象を扱っているが、ここでは著者の宗教類型論に関わることについて取り上げる。著者は「類似宗教」、「新興宗教」、「新宗教」の三つの概念について再考察している。「類似宗教」は朝鮮の宗教を卑下する朝鮮総督府によって作られた用語だが、解放後も継続して使用された。「新興宗教」という用語は70年代頃出てきたが、二つの概念を区別する明確な基準が設定されていないという。そこで著者はその基準として「呪術性の有無」「反道徳的行為の有無」「奉仕精神の有無」「教理の明確性」「創造性」という基準を提示している。三つ目の「新宗教」は「価値中立的」で近現代に発生した宗教を呼ぶのにもっともふさわしいが、「大衆教化のための組織」や「普遍的な教理」「世界宗教としての条件の有無」「歴史的創造意識の有無」「教理の普遍性」など、著者が考える新宗教としての条件を備えた場合にのみ使用するべきだと主張している。

10章では韓国伝統思想について概説している。韓国宗教の祖型は「仙」的神明⁽⁸⁾が主体となって「巫」的宗教現象を包容する過程で形成された「ハンブル思想」であるという。「ハンブル思想」とはどんなものも排除せず、全てを包み込む力のことであり、包み込んだものと関係性を結び生かす力のことをいう。その思想の特徴は生命力を与え、調和をもたらし、人間性を重んじることである。これによってあらゆる葛藤や対立が解消され、人間の尊厳性が高められるので、人類が共通して必要とする普遍的思想であるという。このように韓国人の本来の宗教性は平和文化創造の旗手となるべき性質を備えているので、21世紀は韓国思想、特に韓国民族的民衆宗教を中心に、新しい道徳文化を創造していかなければならないと主張している。

本書は全体を通して、反西洋、反キリスト教、反日的な傾向があり、韓国の民間信仰に対して批判的な態度で論じるという著者の規範が見られる。例えば著者は9章の宗教類型の基準の中で、呪術的、反社会的な性格を持つ宗教、巫俗などを「擬似宗教」と名付けている。しかし「民衆宗教」を国策によって選び取られた護国宗教と対立させ社会指導層ではない「民衆」から出てきた思想や宗教だと捉えるなら、朝鮮半島において古来から仏教、キリスト教など様々な宗教と習合しながら培われてきた韓国の民間信仰である巫俗を著者の規範によって未開宗教の次元に留め、「民衆宗教」の枠外にカテゴライズしてしまうのは残念である。また教団ではなく個人のスピリチュアリティに関心が集まる昨今の傾向を考えると、今後韓国においても創唱宗教のみを「宗教」とするのは限界があるのではないか。

一方、韓国内で発生した自生宗教、あるいは「韓国化」した外来宗教に対しては高く評価する傾向がある。思想研究に留まっているものを「保守」、外来宗教の思想を自国の社会運動の理念などに利用することを「土着化」と呼び、外来の思想を韓国伝統宗教と習合させ、新たな思想を生み出すことを「韓国化」と呼んでいる。外来宗教の中でもまだ若いキリスト教については、「韓国化」する課題が残っていると述べている。

9章の「新宗教」と「新興宗教」の類型分けでは、「教理の普遍性」「世界宗教としての十分な条件の有無」「歴史的創造性」という基準を提示しているが、どれも抽象的な表現なので明確に理解できない。例えば、「普遍性」とは異なるものを包み込んで関係性を結び新しいものを生み出す

「ハンブル」思想を指すのか。「世界宗教」とは深い思想体系を持つ宗教のことを指すのか。「歴史的創造性」とは宗教思想によって人類史を再解釈する試みと考えていいのか。また6章で高等宗教は「高等と未開の構造」を作り上げていると批判しているにもかかわらず、宗教教団の優越を分け格付けする基準を提示しているようにも見える。

また著者が使用する概念に不明瞭なものがあった。著者は「民族」を五千年前から連綿と続いてきたものと捉えているが、「民族」は封建社会から市民社会へ移行し、民族・国民国家成立時に作られたというのが一般的見解である。朝鮮史においても李氏朝鮮の封建社会後、大韓帝国期に近代国家の枠組みを成立させるために使用されるようになった用語であったはずである。また「民族的民衆宗教」なる造語が使われているが、上記の概念の曖昧さや説明不足を補わなければ、この概念自体の有効性に疑問が生じる。

さらに「民族的民衆宗教」の五大脈については各々の宗教の教理や中心思想の説明に留まっており、民衆を引き付けたのは思想のどの部分なのかなどの分析が少ない。「民族的民衆宗教」には韓国人の本来の心性である「ハンブル」思想または「仙」思想が見られるというのが著者の主張であるが、圓仏教の「圓融会通」思想を除くと、残りの思想についてはそのことがほとんど検証されていないのが残念である。

様々な疑問はあるが、本書が韓国近現代宗教史研究における新たな試みであったことも確かである。既存の研究では韓国の伝統思想として巫俗が着目されていたのに対して、「仙」思想を韓国思想の根本に捉え直したり、近現代韓国宗教の中で著名な「東学」、「甌山教」、「圓仏教」に「正易」、「大倥教」を加えて五大脈とし、それらに共通して「弥勒信仰」、「鄭鑑録」を基礎とする「後天開闢」思想が存在することを見出すなど、深い思想的・理論的分析を行っている。また五大脈が韓国古来の思想や韓国選民思想などを根拠に民族的主体性を模索し、さらに思想に留まらず社会の中で実践的意義を持つことを明らかにするなど、思想と社会との関わりについても論じられている。

参考文献

韓国宗教学会編『解放後50年韓国宗教研究史』 図書出版窓 1997

註

- (1) 「メシア思想」「真人信仰」の一つで、悪政に苦しむ民衆を、時がくれば真人が朝鮮半島の南の島から現われて、民を救ってくれるという思想。
- (2) 神明界の恨みを解く儀式のことで、韓国巫俗のクツ（お払い）と似たようなもの。
- (3) 儒教道徳の基本になるもので、「三綱」は君臣、父子、夫婦のあり方を、「五倫」は君臣、父子、夫婦、長幼、朋友のあり方を表したものの。
- (4) 羅喆は建国神話に出てくる王「檀君」を祀る「大倥教」を1909年に設立し、植民地期は武力闘争などを展開した。
- (5) この3人の神が朝鮮建国神話に登場し、古朝鮮を建国させる。
- (6) 少太山は「圓仏教」を1916年朝鮮半島南部において開く。法身仏の一圓相を信仰の対象にし、円を象徴としている。仏教の現代化・生活化を主張している。
- (7) 結婚儀式を執り行う宗教的職能者のこと。
- (8) 「宗教」または「信仰」の韓国的表現。